

山崎一穎著『鷗外ゆかりの人々』を読んで

清田文武

『森鷗外論攷』（おうふう、平成一八）を出版して、それほど年月を経ていないのに、引き続きいての名著である。大体はかつて『評言と構想』に発表の論考に手を入れたものというが、その後得た資料・知見を少し加え注を付して論述したとしても、容易でない作業であったにちがいない。この間管理職や公的な各種委員等を歴任しているのである。いずれこうした書は出版されるであろうと考えてはいたが、よくもここまでと、聞き書き・博搜の上に立つ大冊を手にして思うのである。しかもこの間、先回の書の「跋」にも記すように、容易ならざる病巣をかかえ、大手術をも経てのことであつて、その意志・気力にはただただ圧倒される。

「序」によれば、「今日忘れ去られている人々の生涯を掘り起こし、鷗外との交遊を追って行く」ことをねらいとした書で、主題として取り上げた人物は七名である。「序」にはその人たちの概要が記され、巻頭には諸家及び稀観の関係書冊やはがき等の写真が掲げられており、本書には新資料の翻字と紹介が随所に見え、家系図・系譜も示され、巻末には「附 鷗外との交流略年譜」、「跋」と収録論文初出一覧を置く。

山口秀高（虎太郎）「舞姫」評で知られた存在であることはい

うまでもないが、眼科学を修めるためドイツ留学の際、鷗外がその洋行に期待を寄せた人でもあった。それで、以前私も知りたく少し探索を試みたことがあつたけれども、途中で放棄してしまつた対象である。それだけに、先学の調査も踏まえつつ『医海時報』『東京医事新誌』『官報』等によってその足跡をよくここまで明るみに出したものという感を抱かせる。その山口を鷗外に紹介したのが、弟篤次郎であつたというから、鷗外も親しみを感ずるところはあり、批評や創作で刺激を受けたかと思われる。初期の評論に考察を加え、また「河浦島を讀みて」の批評などなお注目されてよい点を解明して、参考になる。「キタ・セクスアリス」をめぐる発言の往復書簡は不明であるものの、これが問題作であつただけに表現の自由を重んじていた鷗外には励まされる思いがしたはずのことを視野に収め、一方、山口の筆鋒が次第に鋭さをなくしていくあたりも、著者は見逃してはいない。

玉水俊媿。下に配される長井金風・宮芳平・渋江保の章とともに雄篇と称するにふさわしいものである。おそらく氏は、しなやかなだけのことであつて、それぞれについて一書をなすことが出来たのではないかと思う。俊媿は、小説「二人の友」のモデルの一人であり、小倉時代の人間模様の一齣を描いた「独身」からの推定によつても、鷗外と相通じ、気をゆるして交際したと思われる若い禅僧であつた。鷗外が小倉で出会つたこの人物を研究対象とした中で、山崎氏の幸運は、今村元一（筆名速男）氏との文献上と直接との出会いが大きくあつていたようであるが、附記によれば、その他の多くの人とのつながりのあつたことが窺われる。

こうして玉水俊媯の閨歴がたどられ、鷗外との人間関係が浮き彫りにされる。唯識論を鷗外がこの僧から講義してもらった際のテキスト『成唯識論』が東京大学総合図書館の「鷗外文庫」に蔵され、大塚美保氏らの注目すべき関係研究があるが、俊媯が用いた北九州市立中央図書館所蔵の方も山崎氏は紹介していて注目される。この仏典の勉強の跡を鷗外は手稿『唯識鈔』にも残しており、氏はその理解の解明に示唆する覚え書きも写していて、鷗外への照射でも期待される。ケール著哲学史の一章を俊媯が「哲学の概念」の題で訳した珍しい文献も目にとまる。鷗外が俊媯の訃報に接した二ヶ月後に「高瀬舟」を草していることを指摘し、この僧の導きで知足の心を学んだと記していることに、私などハッとさせられて、本書の射程の長さを思うのであるが、こうした箇所は全篇に少なくない。

平出修。「スバル」は鷗外が顧問であったが、平出はそういう雑誌の出資者で、編集にも携わっていたことから、鷗外の文芸活動を考えると、重要な役割を果たしていたことになる。いわゆる大逆事件の審理には弁護士として活躍しており、その点でも鷗外とつながりのあった人である。平出は、法廷・創作を介して山原有朋のいわば対極にあった人物とも見られ、鷗外の立ち位置には微妙なところがあつたわけで、本書はこうしたあたりに諸資料を位置づけて論を展開しており、また芸術における表現の自由の問題に対する鷗外の意識には強いものがあった一事からすると、今後いつそう注目されてよい章と解される。一方有朋の歌の師匠が井上通泰であり、井上は鷗外とも交友があつたことをおさえれ

ば、森銃三氏の、有朋・通泰・鷗外をめぐる発言の扱い方にも少し触れてもらいたかつたとも思うが、関係文献の時間的前後のこともあり、情報の内実や観察の文脈からするとあえて取り上げなかつたのかもしれない。平出修の二足わらじの生と永訣式における鷗外への言及にも関心を引くものがある。

長井金風。「浪江抽齋」の成立に重要な役割を果たした人物の一人であつて、本章は、注や付記等をも加えれば史伝「長井金風」の観を呈する。その金風（本名^{モトノリ}濱、通言行）は大館に生まれ、上京して中村敬字に洋学を学び、根本通明門下の大久保霞城に兄事したとある。佐佐木信綱を介して鷗外とのつながりが出来たというが、鷗外は、金風の学識のため積極的になり、時に自宅訪問したことも、本書ではたどられている。「養花譜」の一文があり、庭には四季の草花を絶やさなかつたという人柄から、自庭の花暦を書いた鷗外もたしかに親しみを覚えたに相違ない。山崎氏は、晩年の鷗外が津下四郎左衛門・宮芳平ら「灯を掲げて一途に生きながらなお不遇である人」に暖かい心を向けたとし、「学識・才能がありながら不器用な生き方をし」たという金風にも同じく配慮し、また信を置いていたことにも筆をやつて、晩年の鷗外を心豊かにした一人と思わせる。金風の著作目録（未定稿）を付す。

本間俊平。「鎚一下」のHさんのモデル。鷗外の精神史ではその出会いに見逃せないものがあったことを窺わせる人物に照明を当てた章である。歴史小説発表の時期の中における作品であるだけに、その位置づけや様式的特色の問題をめぐつて、私には関心を引く考察である。「鎚一下」の行実から発見された「猷身」の

徳は、やがて『安井夫人』（大正3年4月）、『ぢいさんばあさん』（大正4年9月）で結晶の純度を高めて行く。」との把握も見えるが、作品の題名の理由となった女流詩人の名及び原詩とその訳とを、小堀桂一郎・唐沢徹両氏の助力により、紹介して貴重である。私事になるが、大学卒業後程なく転勤で短期間勤めた中学校の校区に、本間俊平の故郷・間瀬村高屋（現新潟市）はあった。村人に尋ねたけれども、これといった情報は得られず、また研究の対象としては探索の手を延ばす余裕も力もなかったのであるが、この地域は北海道に出稼ぎ（漁業）の多い所で、萱葺きの家が並び、一瞬時間が停止したかのような錯覚を抱いたものであった。海を見晴らす山裾の村に農地は少なく、かつては鉱山・採石場で栄えたこともあり、今思うと本間俊平がここを出て社会的に活躍した人であったことに頷けるものがあるのである。

宮芳平。いうまでもなく小説「天籠」の主人公M君である。某展覧会（いわゆる文展）に出展して落選した後、その審査員の一人であった「私」（＝鷗外は洋画部門の主任）を尋ねた青年のことを鷗外は書いたのであるが、山崎氏は、後年の宮芳平による『LAVINIA』をもとにして『琅自伝』から、画家の生い立ち、精神の形成をめぐり、可能な限りの文献資料、関係者からの聞き書き等で追尋する。そして「天籠」が「一見事実の聞書のようにでありながら創作である」という機微を照らし出すのである。作中のW先生は鷗外とも交際浅くはなかった東京美術学校教授の和田英作（鷗外の親しい友人原田直次郎の弟子）であるが、実際宮芳平に対した和田先生と小説におけるW先生とは異なるところのあることを明らかに

し、そこに鷗外も投影されていること等を捉えている。探求はこうした方面の解明だけではなく、実際の画業にも当たるなど、広く目をやって宮の詩人的資質の方面、「天籠」以後の鷗外とのかわりをも、その人生全体の中に捉え握え、文芸と絵画との交流にも照明を当てていて、『森鷗外論攷』と併せ読むべき章である。

洪江保。「鷗外文庫」には保筆録の『抽斎没後の洪江家と保附五百』を蔵する。この中の抽斎の妻五百すなわち保の母の大胆な例のエピソードは、『洪江抽斎』でよく知られているが、この度の書では、誰袖（みそでま）という割烹店における一事件の記述を翻字しており、この場合も五百は、抜刀して乱入し脅迫する暴徒を、懐剣で追い払ったのであった。氏は、上の挿話との関連から、「鷗外はくどいと感じ取り上げなかつたのだろう」と解釈するが、そうにちがいない。桜井忠温が『銃後』（大正三刊）の「序」を鷗外に乞うたところ、書題は『肉弾』よりもよいが材料が多すぎた、もう少し種を出し惜しみした方がよいものが出来たろう、と話したと桜井は語り明かしている。史伝でも、鷗外はやはり、題材と構成の美的契機等に意を用いていたことを推測させ、いわばその楽屋裏を示した観があつて、興味深い例を提供したものと云えよう。もつとも、稲垣達郎氏が指摘した、そのゆえに鷗外が史的事実や連関の意味を取り逃がす恐れなしとしないことに、山崎氏も注意を払っていることを記しておきたい。今は復刻が出ているものの、『独立評論』の紹介なども評者にはめずらしいものであるが、各自必要に応じてその他の文献への案内となるものが見いだせるであろう。ゾラを引いてのまとめも注目される。

本書は諸資料の紹介にも配慮していて、私などの後学には鷗外研究の宝庫と言ってよいところがある。鷗外研究史に基本的文献の一つとして長く残るであろう本書の刊行の裏には、氏の絶えざる努力のあったことは推測するまでもないことながら、またその人となりの大きくあずかっている、貴重な資料に出合えたことが感ぜられる。湮滅しかねない文献資料を確保したことに、本書をひととく人はしばしば気付くことであろう。こうして鷗外とかか

わりのあった人物が追尋され、併せて鷗外の人とその活動、時代が直接間接に浮き彫りにされていて、一種文化的書として読むこともできるかと思うものである。本書の刊行を慶ぶとともに、「二人三脚」と著者の記す令室の助力を思い、著者の加餐自愛を願って、至らぬ筆を擱く。

(二〇〇九年五月 おうふう A5判 六一二頁 税込九二四〇円)

新刊紹介

佐々木雅發著

『鷗外白描』

この春ご退官された佐々木先生がご自身の鷗外論を整理され、作品論による第一部、それ以外の論考を集めた第二部、そして全体の三分の一を占める『浜江抽斎』論の第三部で構成した本書を上梓された。

ここでは特に第三部を取り上げたいが、当論は多くの本文を引用しながら作品自体が読み直される中で、論文としてだけでなく、先生流の抽斎伝とさえ言えるものが述べられている。それは以前の『阿部一族』論で展開された、『阿部茶事談』が内包している完全な過去を求めて繰り返し返されていった増補の流れへ自らも参加することが

鷗外の創作態度だったのではないかという結論を、『浜江抽斎』を論じる中で実践されたものではないかとも感じられた。

後書きで先生は「人の生とは先人たちの生の(剽窃)、人はなべて(剽窃者)ではないか」と述べている。本書を通読して、そうした先生のお考えが改めて理解できたように思った。

(二〇一〇年三月 翰林書房 A5判 六〇六頁 税込八四〇〇円) [佐々木伸]

佐藤泰正著

『文学講義録 これが漱石だ。』

著者長年の漱石研究の粹を、新たに「語りの文体」をもって伝える「文学講義録」。序章に「漱石はいまも新しい」を置き、以下「吾輩は猫である」から『明暗』まで、

主要作品を時を逐って論じる。或いは著者の個人的な体験を交え、或いは現代の文学理論に批判的に言及し、さらに要所所では哲学をも引く縦横な行論は、その親しみやすさの中にも「文学」とは「人間学」だ」という信念、「作家と作品を串刺しに」して「作品の声に聞く」という研究姿勢の確かさを感じさせる。殊に、『道草』を「神」[身体]「自伝性」の三点から論じた第十五章、および『明暗』を同時期の漢詩と二重写しにして「倫理的そして存在論的に」語った第十六章は、本書中の圧巻であろう。「これが漱石だ」と思わせるとともに、漱石には「まだ奥がある」という新たな問いの可能性をも、読者に投げかける一冊となっている。

(二〇一〇年一月 櫻の森通信社 A5判 四三四頁 税込二六二五円) [小堀洋平]